

## 「のさり」から得る教訓

戸井田岳大

熊本の漁師言葉には「のさり」というものがある。「自分が求めなくても天の恵みを授かった」という意味を持つ。産まれてから死ぬまでの間、人それぞれ良いこと、悪いことと様々な出来事が起きるだろう。そして悪い出来事というものは忘れてしまいたかったり、のちに後悔したりするものである。しかしその悪い出来事でさえ「のさり」として前向きに受け入れることが出来るだろうか。本書は水俣病により差別され悪質な誹謗中傷を数十年の間、受け続けた水俣に住む漁師一家の個人史である。いじめ、不治の病である水俣病、貧しい中での子育てといった今の平和な生活に慣れてしまった人には想像できないような日々を「のさり」として捉えた杉本一家について語られている。本書は主に杉本家の雄と栄子の夫婦を中心に綴られている。序盤は水俣の漁について、雄と栄子の出会い、水俣病の原因について書かれている。中盤以降は水俣病とともに辛い日々をおくる二人の心情が細かく書かれている。

まず杉本一家が誹謗中傷を受ける原因となった水俣病はチッソ水俣工場が海に流した水銀が魚介類などを介して体内に入ることによって発症する病である。栄子の母は杉本家が住まう村で最初の発病者としてラジオで全国に放送された。当時はまだ感染症なのではないかという不確かな情報により杉本家へのいじめが始まったのである。いじめをするという周りの人々の行動は防衛的ものだと私は考える。感染症かもしれない病に罹っている人を自身のコミュニティから遠ざけるために行われたものだと考えられる。しかしそれは被害を受ける杉本家からしたら、なぜ仲の良かった周りの人々が急に拒絶し出したのか恐怖を感じ同時に憎しみ悲しむだろう。栄子は「いじめ返しをしたか！あん人らにッ」(102頁)と仕返しをしたい気持ちを訴えるが栄子の父は我慢しろという。普段やられたらやり返せという父がなぜこのときはやめさせたか、わからない栄子が混乱している描写が印象的である。やがて水俣病は他の人々にも症状が出はじめ雄と栄子も水俣病に罹ってしまう。水俣病がチッソ水俣工場による原因だと公に知られると水俣病患者を抱える家族とチッソ水俣工場の裁判が起こる。杉本家もいじめや病と闘いながら裁判に参加し最後まで戦い抜いていくところが本書最大の読みどころである私は考える。貧しい生活やいじめられる日々を耐え抜き裁判にも勝利した杉本家の雄と栄子はそれまでの出来事を「のさり」として考えるようになる。水俣病という病さえも天の恵みを授かったもの、「のさり」として前向きに捉え教訓とするのである。

私たちもこれから様々な出来事があるだろう。それがどんなに悪い出来事でも「のさり」として捉え教訓にできるだろうか。